

2010年11月23日 report

モリコロ基金、平成22年度展開期活動

「がん患者支援としてのピアサポートの普及と展開」

報告書作成・編集：寺田佐代子

～愛あふれるがん患者支援を！！～

■開催日■ 2010年11月23日（火・祝）

13時～16時半

■会場■ 愛知県がんセンター

第1部：国際医学交流センターメインホール

第2部：アトリウム

■主催■ NPO 法人ぴあサポートわかば会

■共催■ 愛知県がんセンター

■後援■ 愛知県

～ あいさつ ～

愛知県がんセンター研究所 所長：田島和雄  
藤田保健衛生大学医学部病理学教授・わかば会 監事：堤 寛

1950年ごろのがん死亡数は5～6万人、1981年に死亡原因のトップはがんとなり、死亡数は約17万人に達しました。その後の30年間に倍増して、現在、がんによる死亡数は34万人に達し、国民の3人に一人ががんで死亡しています。がんの推定罹患数は年間70万人を越え、国民の2人に一人はがんに罹るとされています。がん治癒率の向上によるがん生存者の増加を背景に、まさにがんとの共存時代が到来しました。私たちは今、がん患者の支援について、がん患者や家族、医療従事者、保健行政の担当者、地域住民が一体となり、社会力復活を目指して真剣に考えるべきでしょう。

一方、がん患者の実態はさまざまです。愛知県や名古屋市といった居住地域や病院の違い、乳がんや前立腺がんなど煩っている臓器の違い、局所の早期がんから全身に広がった進行がんの違い、さらに人々の生活の場の違いもあります。つまり、がん患者支援と言っても、そこには多様な問題があるのです。

がん患者の支援にまず必要なことは、がんに関する知識に裏づけされた情報を相互に共有することです。そのために、マスメディアの力も借りなければなりません。最近、がんの緩和ケアの重要性が国際的に唱えられていますが、そこでは、がんと診断された瞬間から、患者や家族に対する心の支援、がんのライフステージにあわせた医療支援など多面的にがんを取り巻く問題が検討されております。

私たちは、互いの立場の違いを超えて、がん患者支援の輪が広がっていくことを願って、今回のパネル討論会や癒しのコンサートを企画しました。本日のパネ

ラーは、それぞれの立場からがんの患者支援に関する考え方を紹介します。そして、がん患者支援の抱える問題について、みなさまとともに考える場を持ちたいと思います。

先輩患者（ピア）だからこそできる（医療者にはできない）がん患者支援もあります。がん患者同士の“ピアサポート”と医療者の行うがん患者支援がそれぞれ役割分担し、かつ互いに協力しあうことによって、はじめて「本物の」がん患者支援が実現するのではないかと考えられます。

開演 13:00

●総合司会

瀬戸加大（愛知県がんセンター研究所 副所長）

●開会の挨拶

森島泰雄（愛知県がんセンター中央病院 副院長）

第1部 お話とパネル討論会

13:10～13:40

～お話～ 「医療者と患者からのメッセージ」

●医療者の立場から

「がん患者サポートの現状と未来像」

兵藤千草：愛知県がんセンター中央病院副院長

●患者の思い

「サバイバーシップでピアサポート活動を！」

寺田佐代子：NPO 法人ぴあサポートわかば会

●応援メッセージ「医療者と患者の協働への期待」

富永祐民：愛知県がんセンター名誉総長



13:40~14:40

## ～パネル討論会～

「今、がん患者支援として、  
それぞれの立場で何ができるのか？」

### ●コーディネーター



田島和雄（愛知県がんセンター研究所 所長）

堤 寛（藤田保健衛生大学医学部病理学 教授）

堤先生は慶応大学院生時代に田島先生と出会っていた。今回30年ぶりの再会が「がん患者支援活動」。すごい「ご縁」！

### ●パネラー



寺田佐代子（NPO 法人ぴあサポートわかば会 理事長）

横山光恒（NPO 法人がんサポートセンター 副理事長）

小室邦子（愛知県がんセンター相談室 MSW）

水野信匡（愛知県がんセンター 消化器内科 医長）

向井未年子（愛知県がんセンター がん看護専門看護師）

金子千之（藤田保健衛生大学医療科学部 講師）

それぞれの立場から、それぞれががん患者支援としてできることを発言した。ここにいるひとは、みなさん、「自分は何ができるか？」を真剣に考えているひとだと感じました。

## ～感謝～

NPO 法人ぴあサポートわかば会  
寺田佐代子

2003年に発足した小さな任意団体「わかば会」は、

2009年はNPO法人化し、1年あまりがたちました。今年度、あいちモリコロ基金から助成金を受けることができました。さらに、愛知県がんセンターの理解と協力があって、今回のイベントが実現しました。ひとえに感謝いたします。今後、未来に向かって、医療機関とがん患者団体が協働して、どんなことが可能になるのでしょうか？とても期待します。今回、愛知県がんセンターと私たち患者団体の共催を実現、具体化するにあたって、多くのみなさまのご理解とご協力をいただきました。ありがとうございました。

私たちは、ひととひとのつながりを大切にしながら、仲間に寄り添い、仲間とわかちあえる活動を展開していきたいと思います。

皆さん、どうぞ、応援してください。私たちもがんばります。

## 第2部 癒しのコンサート

司会：寺田佐代子&堤 寛

15:00~15:05

### ★医療者と患者のハーモニー

オーボエ：堤 寛 & ピアノ：寺田佐代子

♪アベ・マリア（グノー）



グノーのアベ・マリア・亡き友に捧げる祈りの曲として、「がん患者と医療者のハーモニー」をテーマに、がん患者がピアノ伴奏、医療者がオーボエ、デュオ8年目になります。

15:05~15:20

### ★未来の医療者

藤田保健衛生大学管弦楽部

指揮：山本直樹（藤田保健衛生大学 共同利用  
研究施設 分子生物学・組織化学 講師）

Vn：前田利樹・須崎紫・中島菜月

Va：伊藤 慎（藤田保健衛生大学客員講師）  
 Vc：大西 縁 Cb：坂口紗也子 Fl：平松範子  
 Ob：鈴木裕賀里・打田恵理  
 Cl：鬼頭怜子・中村夏実  
 Hr：刀根由美子 Per：田口 周

♪ ドレミの歌    ♪ 翼をください



「未来の医療者＝医療系で学ぶ学生」のがん患者支援活動参加は嬉しい。当日の会場設営も全面的に協力してくれました。

15:20～15:35

★患者・音楽仲間

フルート：前木寛子    ピアノ：中尾典子

♪十五夜お月さん

♪フライ・ミー・トゥー・ザ・ムーン

♪月の光



乳がん患者中尾さんとは、患者会発足2年目からのお付き合いです。わかば会メンバーのコーラスの伴奏もしていただきました。沖縄県にあるハンセンの施設にも慰問コンサートで遠征しましたね。前木さんは、耳のがんの患者で右耳聴力を失いながらもフルートの先生かつ演奏家として活躍しています。前木さんは最初サポートプログラムのことでお問い合わせくださいましたが、フルートを演奏されると知ってからは、演奏をお願いしています。音楽で生きる喜びを表現してくれるお二人には、これまでに何度もがん患者支援活動に出演していただきました。これからもよろしく！



指揮の山本直樹先生と中尾さんは患者会活動で旧知。久しぶりに会ったこの日、準備中に意気投合し、山本先生も飛び入りで加わって、フルート三重奏で「星に願いを」を演奏することになった。息のあった演奏でした！

15:35～15:50

★学生時代の友

うた：脇田万貴子、福田淳子

ピアノ伴奏：瀧 真由美

♪かけがえのない命

♪きみの明日に

♪胸のおくて



福田さんは、愛知県がんセンターで手術を受けた患者さん。かつて入院していたところで歌える幸せをかみしめながら、入院患者さんに、「あなたも元気になれるよ！」と声をかけました。3人は、学生時代からの「友達つながり」なのです。

15:50～16:10

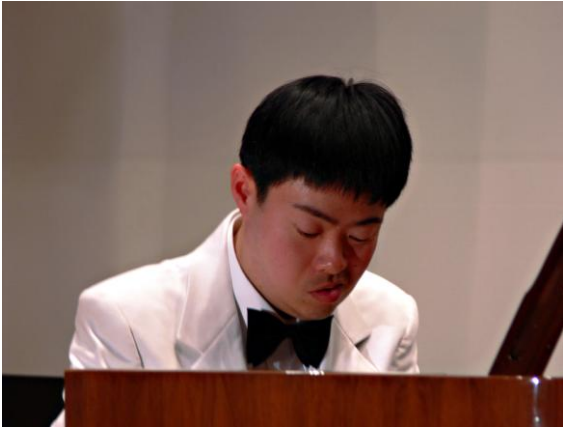
★特別ゲスト

ピアノ：越智章仁    語り：越智知子

♪「愛のBGM」（オリジナル曲）

♪「十和田湖」（オリジナル曲）

♪「言葉にできない（小田和正）」



医療者とがん患者で共演するコンサート活動 8 年目になる。この間、多くのひととつながりができた。音楽をすることで、誰もが自然に友達になれる！がん患者支援活動に音楽を！

16:15～16:25

★みんなで歌いましょう～～

♪翼をください



章仁さんのオリジナ「愛のBGM」をバックに、知子さん（お母さん）による語りで彼の音楽人生を聴く。続いて彼のオリジナル曲「十和田湖」と小田和正の「言葉にできない」。会場はシ～～ンと静まりかえった。おそらくそこに居た誰もが彼のこころの音楽に酔いしれた。誰もが自然に彼の音楽に吸い込まれていく。歓喜の涙さえこみ上げる。いったい彼の演奏は？まさに天から降りてくるエネルギーで全身を揺さぶられるような、美しい音がこころとからだに浸透して、あたりがすべて美しくなるような喜びを感じる。楽譜を読めない彼は、自分のこころに感じるままを音にする。この「感性がすべて」だからこそ、「純粋な美」を表現できるのかもしれない。

私（寺田）が、彼と出会ったのは、15 年ほど前になる。私が福祉の仕事をしていた頃、彼のコンサートを主催したことがある。その後、私は乳がんになり、患者会主催でコンサートをするようになり、演奏してくださいとお願いするようになった。以後、私たちのコンサートで、何度も何度も演奏していただいている。私は、彼の演奏を聴いて、未だ飽きることがない。

障害とは？ 健康とは？ 音楽の世界では、障害も病気も関係なく誰もが平等につながるができる感動がありますよね？ 障害者支援、がん患者支援、弱者を支える輪は、地域社会のどこにでもあってもいいはず。また音楽は、ひととひとをつなぐ力があります。

章仁さんのお父さんは、彼が 3 歳のとき、がんで亡くなったそうです。生前、「章ちゃんは天使の子だよ」と言ったそうです。その通りです！天使は、ひとを癒す音楽を奏でるのです。章ちゃんは、今、がん患者支援活動で演奏しています。天国のお父さんもきっと喜んでくれているでしょう。天使の子の奏でる音楽にみんな酔いしれていました。

16:10～16:15

★トーク

堤 寛「患者と医療者のコンサート活動 8 年目」

出演者、来場者、全員で大合唱となった。先輩患者、入院中患者、家族、医療者、学生、一般のひと、みんなで歌ったことは、一体感を感じ、ここでひとつの「輪」になり、「和」になった。音楽は、ひとのこころに響く。みなさんありがとう！

16:25～16:30

★閉会の挨拶

田島和雄

今日のすべてをしめくくっていただきました。

会場のアトリウムには、拍手が響き渡りました。

～田島先生へ 寺田より感謝～

本当にありがとうございました。今回は、本当にお世話になりました。特に、今回の企画がよりよいものになるように、出演して下さる方々や施設使用に関するすべてへの依頼、連絡をしていただきました。当日のお話、パネル討論会もとても上手にまとめていただきました。ありがとうございました。

次年度も、がん患者支援活動にお力を貸してください！！

■当日参加者数■

出演者 第 1 部と第 2 部合計で 33 名

お手伝いボランティア 4 名（伊藤、肥田、林、大倉）

来場者 第 1 部 130 名ほど

第 2 部 200 名ほど

★県庁の職員さま 3 名、来場していただきました

## ■会場設営■

当日、愛知県がんセンターの職員、運用部の方が2名、朝早くから終了時まで職員の方が動いてくださいました。運用部長も来場してくださいました。

## ■終了後、こんな感想をいただきました■

### ～ある参加者からのメール～

今日 アトリウムでの演奏 聴かせていただきました。帰りにお声がかけたかったのですが お忙しそうでしたので 失礼しました。

とても 素敵なプログラムでした。感動しました。心温まる演奏でした。患者と医療従事者のハーモニーは素敵です。

今回の催し物をもっと早く知っていたら たくさんの知人に声をかけられたのにと残念でしたので、まめにHP 拝見させていただきます。

大腸がんの義父を五年前に見送り 遺された家族間に大きな歪みができた辛い日々を回想し今日は涙を流しながら聴きました。これがきっかけで 始めた音楽療法の勉強と介護施設での活動で 様々な事を学んでいます。

また次回のイベントに参加できたら嬉しいです。今日は お疲れ様でした。ありがとうございました。

### ～出演者：藤田保健衛生大学医療科学部看護学科2年生・オーケストラ部学生責任者：

#### 坂口紗也子さんから～

本日のがん患者支援コンサートに出演させて頂きました藤田保健衛生大学、オーケストラ部学生責任者の坂口紗也子です。本日は真に有難うございました。昨年に引き続き患者様の前で演奏する機会を設けていただきまして、とても感謝しております。

今回の演奏で私は昨年以上に患者様とコンサートの時間共有している実感を持つことができました。私達が「翼をください」を演奏している最中、観客席から歌声が聞こえてきたのです。それに気づいた時、私達の演奏と患者様やその家族の方の歌声が重なり合ったことにとっても感動しました。

しかし演奏以外に関して、医療従事者を目指す私達ですが、今回患者様に対しての配慮がまだまだ未熟な部分がありました。演奏をすることも大切でしたが、患者様とコミュニケーションを積極的にとりにいけ

なかったことは今回の反省点の1つでもあります。これを含む、多々ある反省を今後の私達の活動に活かしていきたいと思います。

再び演奏する機会を頂けた際にはよろしくお願い致します。貴重な体験をさせていただきまして有難うございました。

### ～藤田保健衛生大学管弦楽部：中村夏実さんから～

昨日は、貴重な会に参加させていただきありがとうございました。少しでも、患者さまや関係者の方とお話することができ、勉強にもなり楽しかったです。

私は、音楽を通して医療というものに携わりたくこの学校や部に入りました。そのため、このような会に参加させていただけることはとても嬉しく思います。今後も一緒できる機会を楽しみにしています。ありがとうございました。

### ～いつも当日お手伝いボランティアで参加して下さる株式会社東海損保の林直人さんから～

♡私の使命は、保険によりがん治療における選択肢を増やすことです。♡

寺田さんへ、

23日はお世話になりました。私の感想です。7年前、たまたま、医療に詳しい友人ががんになり、ほんと家族のように体験を共有させていただきました。その体験が、父の治療の際には、とても役に立ち、医師の説明もよく理解でき、落ち着いて今後のことを予測して対応することすら出来ました。

しかし、その体験を伝えていこうとしても、医療関係者でもなければ、がん患者でもない立場では、まだまだ、うまく伝えられません。仕事柄、リスクに対し、経済的対処を提案していながら、がんとともに生きてゆく環境という、目の前のリスクがそこにありながら、知らないで損している童話「ありとキリギリス」のキリギリスさんに対し、うまく伝えられない、もどかしさでいっぱいです。

それでも、私は、目の前の人、知らないで損しないように地道に情報を伝え続けてまいります。

## ～歌を歌ってくれた脇田万貴子さんから～

音楽の力の大きさを感じます。

がんセンターはコンサートホールのような空間があり、音響的な問題はありますが、もうそんな事はどうだってよくなる位、あそこでやる価値はあると思います。またみんなで大合唱したい。

## ～出演者：管弦楽の指揮：山本直樹（藤田保健衛生大学共同利用研究施設 分子生物学・組織化学 講師）さんから～

今回、『がん患者支援としてのピアサポートの普及と展開』の活動の一環として、本学の管弦楽の学生、当日会場にお越し下さった患者様および関係者の方々と一緒に音楽を通じた時間と感動を共有する機会を頂き、誠にありがとうございました。私は今回の演奏会の参加にあたり、残念ながらごく僅かな時間しか学生と練習することができませんでしたが、“優しい気持ちで音を奏でる”ことを目標として取り組み、出来る範囲で学生と共に実践できたのではないかと考えております。また本イベントに参加させて頂いた学生にとっても、大学の授業では教わらないことを勉強させて頂くことができたのではないかと思います。

改めて参加させて頂く機会を与えて頂いたことへの感謝と本活動の今後の益々のご発展を祈念致します。



## ～パネラー：サバイバー：横山光恒さんから～

お疲れ様です。横山です。終了後の感想です。「今、がん患者支援として、それぞれの立場で何ができるのか？」のテーマに沿って、私は、「がん患者として何ができるのか」を考え、パネリストとして壇上よりお話をさせて頂きました。

先生方のお話を拝聴させて頂き、最前線の医療者の

皆様の熱い思いに触れる事ができました。地域のがん治療の最前線を切り開く医療者の皆様と患者支援活動をしている私たちが、同じテーマの下で討論出来る事は、さらに患者に近い医療を実現するための大きなステップだと感じます。

後半のコンサートは、多くの患者の皆様が参加され、音楽に包まれた癒しの時間を過ごす事ができました。演奏をじっと聞かれている中で、涙を流されている方も・・・

がんと向き合うのは決して一人ではないと感じられたひと時でした。

## ～当日、車椅子の受付ボランティアをしてくれた株式会社C-POWER（人を魅了する生きたデザインをクリエイト）代表取締役 肥田 和明さんから～

率直な感想として、本当に感動しました。

一緒に時間が過ごすことができ嬉しかったです。同じ病気（がん）で苦しんでいる人が立ち上がっていることで勇気をもらったと言ってみえる参加者の方がおられました。

私自身も、身体に障害を持っており、車椅子にのっていますが、だからといって何も変わらない、楽しいこと、辛いこともみんなと同じように感じる。だったら一度の人生、自分らしく突き進みたいという想いから、毎日まい進しております。

今回のイベントに参加して、想いがより強くなりました。ありがとうございました。次回も皆さんにお会いできるのを楽しみにしております。

追伸。

耳から入ってくる感覚、音楽ということですが、眼から入ってくる感覚、アートの部分でコラボレーションできる日がいつかやってこれば幸せです。



～パネラー：金子千之（藤田保健衛生大学医療科学講師・NPO 法人ぴあサポートわかば会理事）～

NPO 法人ピアサポートわかば会主催の医療者とがん患者が「がん患者支援」について語り合うに参加させて頂きました。今回ははじめての企画でしたが今後の課題を残す内容もあったと感じています。しかしながら、会場に足を運ばれたがん患者（その家族）や医療者の皆さんは本会の主旨は理解して頂けてたのではないのでしょうか？また、第2部の癒しのコンサートでは多くの出演者で、演奏、歌、全員による合唱もあり、特に驚いたことは特別ゲストの越智章仁さんのピアノ演奏には深い感銘を覚えました。眼を閉じてピアノの演奏を聞いていると心地よい気持ちになりました。今回の企画は2部構成で、やはり癒しのコンサートはがん患者支援には必要不可欠と痛感しました。音色は脳裏に残り、癒され、是非継続してほしいと思います。

この度の企画は愛知県がんセンター中央病院が、がん患者団体を応援するスタイルで計画されました。今回のような企画が愛知県がんセンター中央病院を拠点に NPO 法人ピアサポートわかば会と協働による患者支援が継続できることを望みます。

今後はより多くの人に患者支援ができるようにがん患者さんと医療者が同等に話し合える環境ができる事を懇願しています。

最後に今回の運営に参加してご協力下さいました関係者に深く感謝申し上げます。

～主催側として、この記念すべき、医療機関と患者団体の共催の第一歩、この企画のはじまりとプロセスを書き留めておきたい：NPO 法人ぴあサポートわかば会：寺田佐代子より～

モリコロ基金の展開期活動の助成金申請は、NPO 法人ぴあサポートわかば会が独自申請し、獲得しました。申請のなかで、事業としてシンポジウムを計画してありました。それは、ウィルあいち（愛知県女性総合センター）での開催予定をしていました。しかし、助成金が決定してから、愛知県内でのがん患者支援を考えたとき、「愛知県がんセンターの協力を視野に入れることが大切ではないか？」という思いがあったので、私は、愛知県がんセンター名誉総長富永先生に相談しました。「いいですか？寺田さん、愛知県がんセ

ンターで行うには、共催にしないと無理です。共催は、あなたがたにとって一長一短があります。それでもいいですか？」とまず言われました。「長」とは、医療機関との連携を実現できること、がん患者支援活動を医療機関と協働でできることでしょうか。「短」とは、共催となれば、自分たちのだけの思いどおりにはできない面も生じるということだったのでしょうか？その詳細は質問するまでもなく、迷いもなく「はい。愛知県がんセンターで行うことは、とても大切な意味を持ちます。それだけでもやる価値があります。お話進めてください。お願いします」と申し上げました。そして、愛知県がんセンターへの働きかけをしていただき、田島先生への紹介をいただきました。私は、3月17日に田島先生を訪問し、二村総長、瀬戸副所長、中村運用部長にもお目にかかりました。そして、会場を愛知県がんセンターで可能か、会場の使用可能な日時を田島先生にご検討いただき、11月23日（火、祝）開催に向けて調整が始まりました。会場を借用するにあたっては、愛知県がんセンターとの共催が条件とのことでした。事業の経費は、私たちが得たモリコロ基金助成金で支出するのですが、会場は愛知県がんセンターから無償提供され、愛知県がんセンターの先生方の出演はすべて無償でご協力いただきました。今回、愛知県がんセンターとの共催という形は、まさに、医療機関が患者団体を支援する形を生み、がん患者団体と医療機関が協働でがん患者支援活動を行うという、がん対策の大切な項目であるのに遅れているがん患者支援の施策を具体化し実施する活動となりました。終えてみて、私たちに「短」はなかったと思います。協働によって可能性が広がるという確信が持てました。今回は、初めの一歩。継続したていきたいです。

私の唐突な富永先生への相談ではじまったのですが、富永先生から愛知県がんセンターへ働きかけていただけたおかげで、協働実現可能の道がみえてきたのでした。愛知県がんセンター研究所所長田島和雄先生をご紹介いただいてからは、私たちは、田島先生を通じて、企画計画、準備に入りました。田島先生と何度もメールでのやり取りを重ね、数回田島先生を訪問して話し合いを重ね、11月23日の開催日を迎えたのでした。今、思い返せば、富永先生に相談したときのあの私の勇気はどこからきたのでしょうか？唐突にもメールで、「モリコロ基金をいただいた。愛知県内での

がん患者支援を行うとき、愛知県がんセンターが関らないのでは・・・富永先生、愛知県がんセンターは協力してくれるでしょうか？」そんな内容だったと思います。そして、富永先生は、真摯に対応してくれました。いえ、私は、きっと、話せばそうして下さるに違いない方だと信じて相談したのだと思います。

富永先生との出会いは、2007年愛知県健康祭のなかでのイベントで、私が富永先生との対談の相手役になったのがきっかけでした。2008年にも、愛知県主催のがん予防のためのがん講演会で、富永先生の対談相手になりました。以来、何かあれば、富永先生にあれこれあれこれ意見を伝えてきたのでした。今思い返せば恥ずかしいような・・・いち患者が名誉総長にダイレクトメールで、意見言うのです・・・富永先生もなんて患者だ！とびっくりしていたに違いないです。でも、とてもお優しいと思うのは、必ず、ちゃんとお返事をくださったのです。しかもアドバイスつきで。そこがやはり凄いのです。そして、今回、またも唐突に、ずうずうしくも、富永先生のお作りになった焼き物、陶芸の作品をおねだりしてみました。そして、富永先生は、ご自分の作品である湯呑み茶碗を私に送ってくださったのです！！やったあ！！これは、今回のプロセスの最終を飾るものとなりました。この湯呑み茶碗を見るたびに、2010年11月23日に私たち患者団体と愛知県がんセンターが初共催で行ったがん患者支援活動への道のりすべてを思い出します。きっと私のこのころの支えになるでしょう。

#### ～総合司会をしてくださった、愛知県がんセンター研究所 副所長 瀬戸加大先生から～

寺田佐代子さま：

これから、患者さんとお話ができる機会ができたことをうれしく思います。

日本の患者会はどちらかというと、医療者と敵対するような形になってしまいがちです。

しかし、日本の医療制度にも大きな問題があり、そのことが原因で医療者も患者側も悩んでいます。これらはともに解決していくべき問題です。

また、その制度だけに力を傾けるのではなく、心のcareこそが本当に求められていることだと思いました。その点で、兵藤副院長のお話はとてもよかったです。

Peer support という意味はお互いが助け合い、助けられあいということでその活動を通じて癒しが与えられるのだと言うことを第3者としてしか理解はできてはいないと思いますが、大変大切なことだと思いました。

コンサートについては、アトリウムが少し音響効果が悪く、マイクのおともわれがちではありましたが、それをかんがえても、とてもよかったです。

オーボエのアベマリアはとても素人とは思えず、フルートもすばらしく、ピアノ演奏者たちもその実力と心がすばらしく伝わっていました。

大変よい経験をさせていただきました。

どうもありがとうございました。

～「愛あふれるがん患者支援を！！」の主催者の一員として：パネルコーディネーター、オーボエ演奏者、藤田保健衛生大学医学部病理学教授、NPO 法人ぴあサポートわかば会監事：堤 寛先生より～。

今回の活動は、患者会であるわかば会と愛知県のがん診療拠点病院の“親玉”としての愛知県がんセンターが協働で開催した初めての催しであり、がん対策基本法の考え方に準じる“医療者とがん患者の対等な協働作業”だった点にまず有意義性があります。音楽を通じて、こころが安定する体験を共有できたのも、とてもよかったです。

贅沢な司会者として、不完全燃焼の感をぬぐいきれない点があります。それは、医療者の方々のことばやその発表内容が、患者に最高の医療サービスを“提供する”ことばかりに重点が置かれていたことです。私も医療者の端くれなのでよくわかりますが、医療者の視点からすれば、チーム医療を充実させて、より質の高い医療を提供する（してあげる）のはあまりに当然のプロ意識なのです。そうすると、弱い立場の患者さんは、医療機関で何か「してもらおう」ことを期待します。つまり、病院の中では医療者と患者は対等な関係に立つことが大変難しいといえます。

わかば会のような患者会は、病院の外（地域の中）で活動しています。患者の自立、アドボカシー活動です。だからこそ、今回、対等な形でこの会が開催できたわけです（いや、資金面からすれば、わかば会が獲得したモリコロ基金で運営されましたので、患者会ががんセンターに貢献した形ですね）。

そう、医療者のベクトルは常に内側に向かおうとします。司会者としての私の狙いは、そのベクトルを少しだけ外に向かわせる、つまり、地域で暮らす“ひと”としての患者さんに目を向ける点にありました。患者さんは病院ではどうしても“よそゆき”になりがちです。本音を言わない(言えない)ことも多いようです。でも、病院の外では、ピア(先輩患者)には本音を言いますし、そこでは基本的に医療者に頼る(気を遣う)ことはありません。自らが自立的に生きているからです。がんという病気に対しても、病院の中では依存的になりますが、病院の外では自らが乗り越えてゆかねばなりません。

患者さんのその両面性を察して支える、そんな姿勢が今、医療者に求められているのではないのでしょうか。その気づきの場にしかたかったのですが、いったいどこまで目的が達成されたのでしょうか。

音楽にはそのような二面性はないと思います。こころが一つになれる。演奏者に医療者とがん患者の区別はありません。健常者と障害者の違いもありません。

越智章仁くんのピアノの音に、みながじっと聴き入ったこと。彼の温かい音楽が確実に会場の人に伝わったことは間違いなくと思います。

だからこそ、わかば会は音楽を有効なツールとして活用しています。患者も医療者も障害者もない一体感。このあたりが、無理のない原点になるのではないのでしょうか。こころのこもった温かい手作りの音楽が、がん患者の自立を自然に促進する方法、がんという病気に対する偏見を解消する手だてになってくれることを期待します。

患者会とがんセンターの協働作業は、まだまだ始まったばかりです。今後、この活動を継続させることができれば、きっとよりよい、“本物の”愛あふれるがん患者支援が達成されるでしょう。診察室や病室を出た場所で活動することの重要性、有効性を、より多くの医療者に気づいてほしいと思います。気づきは変革への第一歩に違いないからです。



オーボエを演奏する堤先生&ピアノ伴奏の私(寺田)

### ～締めめの挨拶：愛知県がんセンター研究所 所長 田島和雄先生から～

皆様、最後までお付き合い下さりまして有り難うございました。本日のプログラムは二部構成になっており、第一部は各専門家によるパネル討論会、第二部は癒しのコンサート、それぞれに「がん患者さんの支援」に想いを寄せた素晴らしい内容でした。特に、越智章仁氏の研ぎ澄まされたピアノの音色は、私のみならず、多くの方々の心を癒して下さったと思います。このようながん患者支援の企画が継続して開催され、多くのがん患者や家族の方々の心が癒されること願ってやみません。今回の画期的なプログラムを企画された寺田佐代子様やその仲間の方々、それを支援して来られた堤寛教授ら藤田学園の関連各位、それにパネル討論会の話題提供者と討論者の方々、癒しのコンサートの演奏者や歌手の方々、さらに祝日にも関わらずお手伝い頂きましたボランティアや愛知県がんセンターの運用部の方々に感謝申し上げます。



30年ぶりの再会となった田島先生と堤先生

この活動が継続できますように！